

だれでもいつの会でも参加できます

9月23日 森三郎刈谷市民の会 発足行事

森三郎童話紙芝居「かささぎ物語」を発表します。

「かささぎ物語」の中には二つの挿入歌があります。これらの歌にはなにか根拠がないかと、「森三郎刈谷市民の会」会員の山田さんが調べてくれましたので、紹介します。

「一つ星目つけた。

長者になアレ。」[表記は「赤い鳥」本文による]

この歌、宮澤賢治の「双子の星」の中で見たよ！

賢治が『双子の星』を書き上げたのは、一九一八年（大正七年）八月で、弟に語って聞かせたようですが、生前は未発表で、世の中に出たのは死後の宮澤賢治全集（文圃堂）（1984～1985年）によつてだそうです。

赤い鳥に『かささぎ物語』が掲載された一九三二年十二月号との時間関係を考えると、どちらかが、どちらかかを見て参考にしたの？と疑問が湧いてきました。

そこで「宮澤賢治イーハトーブ館」に問い合わせたところ、学芸員さんが調べてくれてこんなことが分かりました。

実はこの歌は、江戸時代（一七九七年編纂）の古くからのことわざなどが載っている国語辞書「諺苑」（げんえん）に載っているもので、どちらかが見て・・・と言うよりも 言い伝えのようなものだということでした。

一九二二年十二月に 竹久夢二が編纂した 『日本童謡撰 あやとりかけとり』の中にもこの歌が出ていました。

ちなみに、「一つ星」は宵の明星・明けの明星の金星のことです。物語ではタぐれだから、「宵の明星」でしょうか。

「向うとほりやる

鹿鷲長者の、

肩にかけたる、かたびら。

肩と裾には

梅の折枝、

中は五條のそり橋。」[表記は「赤い鳥」本文による]

この歌は、三河の高浜の年寄りたちが小さい時に歌った歌という設定になっています。まだ瓦工場が立ち並ぶ前の話です。この歌にも何か出典・根拠はないだろうか、高浜の古い歌を知っている方はみえないだろうか？

山田さんは、以前 高浜図書館のボランティアで一緒に岸上さんから、土曜お話会、という高浜の古い民話を紙芝居にしている会の岩月和子さんを紹介していただきました。そして岩月和子さんは、今年白寿をお迎えになるおじ様の岩月賢一さんを紹介してくださいました。

岩月賢一さんは、刈谷中学（八回生）の出身の外科医で、東北大学の教授をされていたことから仙台にお住まいとのこと。電話での回答では、歌については知らない、聞いたことがないということでした。でもお話の中で「帷子（かたびら）」についての面白いお話をお聞きすることができました。

小学校へは麻の帷子を着て、藁草履をはいて行ったこと、麻の帷子は、どちらかと言えば上等だったこと、運動会もそれで走ったことなど、帷子のイメージをふくらませる貴重なお話でした。

「向うとほりやる」は当時の歌詞の一つのパターン？

竹久夢二編纂の『日本童謡撰 あやとりかけとり』に

「向こう通るは・・・」という語句が出てくる歌が二つありました。

——これらの歌についてご存知の方はお教えください。——